

LGBTQを考える

学校における セクシュアルマイノリティ



貴戸理恵 ●きどりえ

関西学院大学准教授(教育社会学)。主な著書に『個人的なことは社会的なこと』『「コミュ障」の社会学』(ともに青土社)、『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに 生きづらさを考える』(岩波書店)などがある。

セクシュアルマイノリティを取り巻く状況

子どもが学校に行かなく・行けなくなる理由の一つに、セクシュアリティをめぐる生きづらさがある。「女装で盛り上がったたり、同性愛を『気持ち悪い』と言いつつたりする周囲について行けなかった」「制服、体育、トイレ、身体測定。とにかく学校は『男』か『女』かはっきり決まっていなくて行けない場所」「教師も『おまえコッチか?』などと平気で差別的なジェスチャーをしていた」

セクシュアルマイノリティの手記などには、そうした話がよく出てくる。

セクシュアルマイノリティの割合は人口の3～5%といわれており、学校のクラスの1～2人は該当する「少なくない少数派」だ。学校がそ

うした存在をいないものとしていることで、多くの生徒が学校に行きづらくなっている現実がある。

教育政策では、「男性、さもなくば女性」という性別二元論が厳然と存在している。例えば、中学校学習指導要領解説においては、2021年現在も「異性への関心」という記述が残っており、同性愛など多様な性的指向はないことにされている。

また、文部科学省は2010年代以降、通知や調査を通じて「性同一性障害」への対応に取り組んでいるが、「性同一性障害」とは「男性／女性」「正常／異常」といった二元的価値に基づく医療上の概念である。出生時に割り当てられた性別に違和感をもつ人は、「女性になりたい男性」「男性になりたい女性」とは限らず、「ノンバイナリー」といわれる「どちらでもない／ある」「決められない」などの場合もあるし、性別違和それ自体は疾患ではない。より多様な性



の在り方を含意する「トランスジェンダー」のほうがふさわしいだろう。

さらに、教育政策においてセクシュアルマイノリティは、いじめ防止や自殺予防といった観点から取り上げられることが多い。しかし、いじめや自殺は、社会のセクシュアルマイノリティ差別の結果として表面に現れてきたものである。教育もまた、社会の一部として自らが差別に加担してはいないか、反省的に問い直していく姿勢が重要だろう。

マイノリティの権利が尊重される社会に

鍵は「マジョリティが変わる」ことであるように思う。ポストコロニアル研究*のなかで指摘されてきたように、マジョリティとは差別的な社会構造から利益を得ている多数派のことだ。その変革がなされないまま「マイノリティに配慮」するだけでは、差別的な構造は維持されてし

まう。

例えば「性同一性障害」は、マジョリティにとって受け入れやすいカテゴリーである。「男性」「女性」という枠組みを壊す必要がなく、「障害のある存在に配慮する」なら自分は何も変わらなくとも対応できると思われやすい。

だが必要なのは、多数派の「厚意」によって与えられる「特殊な人への配慮」などではなく、マジョリティの在り方そのものを問い直すことによって、マイノリティの権利が当然のように尊重される社会をつくることだろう。「生徒は男性／女性のいずれかであり、性的関心は異性へ向かう」ことを前提としている学校環境を、変えていかねばならない。

教育現場での取り組み

では、教育現場に生きる「私たち」はどうすればよいか。重要だと思われる2点を挙げたい。

第一に、子どもたちにセクシュアリティに関する学習権を保障することである。セクシュアリティは性を通じた自己認識や他者との関係性を規定しており、「自分が自分である」ことの根幹に関わっている。セクシュアルマイノリティについての知識や、マジョリティの性も多様な性の



在り方の一つであることなどは、人権教育の一環としてすべての子どもが学ぶ機会を提供されるべきものだ。その際、「セクシュアルマイノリティであること」はその人を説明する多様な項目のうちの一つであり、多面体である個人を「レズビアンの人」などセクシュアリティの特性のみに還元するのが不適切であることも、併せて伝えられるとよい。

第二に、教員や保護者の知識の更新である。教員が無知なあまりセクシュアルマイノリティを差別していたり、生徒間のいじめを見過ごしていたりすることはあまりにも多く、早急な改善が求められる。また当然のことだが、教員や保護者もセクシュアルマイノリティでありうる。学校は職場として同性パートナーをも

つ教員やトランスジェンダー教員の権利を守っているか。PTAは子どもを育てる同性カップルやステップファミリーなど、性や家族の多様性に対応しているか。「自分の学校にはいない」と思うならば、それは当事者にとってカミングアウトできる環境ではないことの現れだと認識すべきだろう。その場にセクシュアルマイノリティがいることを前提に振る舞う人権感覚を、学校に関わる大人たちは身につけていかねばならないと自戒を込めて思う。

子どもは大人が「何を言うか」より「何をするか」をよく見ている。教師や保護者が変われば生徒は変わり、多様なセクシュアリティをもつ人が通いやすい学校の実現が見えてくるだろう。

LGBTQに関してもっと知りたいときに



もっと知りたい！話したい！
セクシュアルマイノリティ
ありのままのきみがいい
(全3巻)
日高庸晴 著
汐文社／2015年



誰かの理想を
生きられはしない
とり残された者のための
トランスジェンダー史
吉野 毅 著
青土社／2020年



10代から知っておきたい
あなたを閉じこめる
「ずるい言葉」
森山至貴 著
WAVE出版／2020年